

4ト冷凍車を軽量化

積載量400kg増 3ト以上確保

製作コストも1割減

キユーソー流通システム(KRS)グループのキユーソーティス(山田啓史社長、東京都調布市)は、4ト冷凍車に独自の軽量化を施し、冷凍機1基の搭載リターゲトリタワー装着の上で積載量3,250kgの確保を表現した。従来の標準仕様の車両に比べ、最大で積載量が400kg増加。10日から三郷営業所(埼玉県三郷市)で運行を始めており、試験運行の状況を見ながら、キユーソー便の標準ボディへの採用を検討していく。(佐々木健)

キユーソーティス

軽量化車両の製作は、社内では「積載量が低下し続ける」との危機感が強まったことから検討を始めた。近年トラックの排出ガス浄化装置や安全対策機器の搭載で積載量が減少。キユーソー便の標準仕様とするべく、今年一品質を維持したるキユーソーは、品質重視の共同配送という方針の下、荷室を分け、温度帯配達が可能な車両を要求しているため、積載量が850kgに制限されていた。

軽量化車両の前で三郷営業所の山崎重雄所長と山田社長。



の製作コスト低減につながった。

CEOに最高経営責任者、ふそうトラック・バス(ハートムット・シック社長兼

川崎市中原区)の中型トラック(フアイター)を採用。荷台の天井と壁・床面の素材を見直し、アルミ製のフレームを使って、FRP製の外板と内板、断熱材の3層構造のボディに変え、荷室を1室にして積扉を省いた。

更に、サイドバンパーやフェンダー、工具箱をアルミやステンレスから樹脂製に切り替え、ロックロッドやちよつがいのアルミ製とするなど、可能な限り軽い部材に変更している。

軽量化車両の製作を進めた同社管理グループ設備管理チームの渡辺昭仁チームリーダーや、キユーソーサピス(西尾秀明社長、東京都調布市)商品事業部車販販売一課の竹内謙謙長らは「エンジンから見直して3ト以上の積載を確保できた。年々、積載確保は厳しくなり、現場では荷物のマスタデータで計画を立てる。過積載になることもある。この車両なら活羅で

きると期待を寄せる。山田社長は「積載効率を高めることで荷主と社会に貢献したい。3ト超の積載量は、予想以上の成果話している。」

だ。次はキユーソー便仕様の窓式はどうか、シャシーまで手を入れたらどう

物流ニッポン新聞
2021年8月24日付3面